

私たちにできること

村上市立岩船中学校 3年 相馬 理子

皆さんは今起こっている戦争をどう考えていますか？「遠くのことでは実感がない」という人が多いのではないのでしょうか。しかし、今、世界のあちこちで戦争が起こっているのが現実です。最近ではイランとアメリカの戦争。石油など日本に大きな関係があるためか連日ニュースは続いています。しかし、ウクライナとロシアや、イスラエルとパレスチナなどは報道が減りました。同じアジアですが、ミャンマーなどの内戦はほとんど報道されません。戦争を「遠くのこと」にしているものは何でしょうか。

私は、時々疑問に思うことがあります。「二度とあってはいけないこと」と誰もがわかっていることなのに、なぜ戦争は起きるのでしょうか。人類は歴史に学ぶことはできないのでしょうか。以前、広島原爆の写真を見ました。その悲惨さを思うと同時に、「こんな事があったのにまだ核兵器が存在しているんだ」と思いました。核兵器や戦争の恐ろしさは誰もが分かっているはずなのになぜ終わらせることができないのか、私は不思議でなりません。

私は祖母から戦争の話を聞きました。私の祖母は当時日本が占領していた中国の満州という国に移住し、6歳まで過ごしました。家長は祖母の父親、私から見ると曾祖父に当たります。曾祖父は軍関係の仕事をしていたため、戦争が始まると当時のソ連の人達にシベリアに連れていかれました。

祖母には二人の、まだ小さな弟がいました。一人は戦争中に百日咳にかかりました。今なら病院であたりまえに薬をもらえます。でも、戦争中だったので、医者に見てもらうこともできずに死んでしまいました。祖母の母親、私にとっての曾祖母は、攻撃から身を隠すために、手で穴を掘って子供たちを守ったそうです。ですが、曾祖母は自分が食べるものがなく、お乳が出なくなりました。二番目の弟はお乳もミルクを飲むことができず、栄養失調で死んでしまいました。

曾祖母の気持ちはどんなだったのでしょうか。一生懸命に産み育てた自分の子供二人を同時に亡くしました。曾祖母は二人を土に埋め、遺品として、二人の髪の毛と爪を切ってアルミの弁当箱に入れました。祖母はそれを持って家に帰ってきたそうです。そして、やっとのことで日本に帰って来た祖母は実家のトイレを見て一言。「ここのトイレ綺麗だね。ここで寝れるね。」と言ったそうです。トイレを見て「ここで寝れるね」なんて子供の口から出るのでしょうか。いったい戦争にはどれほどの語られていないこと、ニュースでは伝えていないことがあるのでしょうか。

テレビのニュースでは、今日も戦争の状況を報道しています。「ひどい」、「可哀想」と思うだけではいけないと思います。「自分たちにできることはない」という人もいるでしょう。たしかに今の私たちには何もできないかもしれません。けれど、現状を知ることにはできます。「何もできない」とあきらめて、私たちは「遠くのこと」と目をそらしているのではな

いでしょうか。テレビでもネットでも、戦争を忘れさせるような楽しい情報があふれています。まだ具体的にはなににもできなくても、戦争のニュースに目を向ける時間を持ち、毎日変化する世界の現状を知ることから始めるべきだと思います。

そしてもう一つ。戦争の本当の悲惨さを、実体験をもって知っている人たちは年々減っています。もしかしたらあまりにも辛く、悲しく、恐ろしい経験だから、話せないという方もいるでしょう。でも、今聞かなければ時間は過ぎ、やがて戦争を知る人はいなくなります。戦争だけにとどまったことではありません。私たちは戦争を知る先輩方にもっと歴史の教訓を教えてもらおうとする態度が必要だと思います。少子高齢化が問題となっていますが、お年寄りの中にはよりよい世の中にするための経験と考えをもっている人がたくさんいるはずです。それを若い私たちから求めていこうとする態度と行動が大切だと思います。